

[原著論文]

教材としての『日本霊異記』論

工藤 浩*

Notes on the Tale of “Nihon-Ryoi-Ki” as Teaching Materials

Hiroshi KUDOH*

Abstract

“Nihon-Ryoi-Ki” are the oldest persuasive stories in Japan. It has not been used as teaching materials in high school Japanese classes. Based on a previous article, its potential as a teaching material will be demonstrated.

KEY WORDS : “Nihon-Ryoi-Ki”, persuasive stories , teaching materials

I. はじめに

筆者は、前稿¹⁾で『日本霊異記』の持つ、高等学校の古典（古文）授業における説話教材としての可能性について考えた。この作品には、教材として扱うに相応しい、

i. 説話内容が平易明確で、編者の意図の理解が容易なこと。

ii. 分量的にも、高等学校の古典の授業の配当時数に適する説話を選べること。

iii. 文学史・日本語史・文化史的価値があること。
の三点が特徴として認められる説話が多く記載されていることを指摘した。その上で、「弥勒菩薩の銅像、盗人に捕られて、霊しき表を示し、盗人を顕す縁」（中巻第二十六縁）を教材として用いた2学年古典Aの授業展開の案を提示した。この章段では、仏法僧の三宝のうちの仏を尊ぶべきことを説くことに主眼が置かれている。

本稿では、これを踏まえて、僧を敬うべきことを示す章段を教材とした2学年古典Bの授業の提案を行うことにする。

II. 学習指導要領における古典（古文）教材の位置づけ

現行の学習指導要領は、「国語総合」の目標に「言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる」²⁾ことを掲げる。そのための教材選定の具体的な観点としては、「我が国の伝統と文化に対する関心や理解を深め、それらを尊重する態度を育てるのに役立つこと」³⁾を挙げ、「神話・伝説などから現代の文学に至るまでの我が国の言語文化に触れるという点にも留意する必要がある。」⁴⁾としている。古典Aは、「古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典を親しむ態度を育てる」⁵⁾ことが目標に掲げられる。教養としての古典を前面に押し出す古典Aに対して、古典Bでは一歩進めて「古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる。」⁶⁾ことを目標に「古典を読む能力を養うことを中心的なねら

*九州共立大学共通教育センター

*Kyusyu Kyoritsu University Career and General Education Center

いとしている。」⁷⁾と定められている。注目されるのは、教材の種類について「教材には、日本漢文を含めること。また、必要に応じて近代以降の文語文や漢詩文、古典については評論文などを用いることができること。」⁸⁾「『日本漢文』については、教材として必ず含めること」⁹⁾のように、「日本漢文」必修が謳われている点である。「日本漢文」とは中国の漢文の「影響を受けて日本人がつくった漢文」¹⁰⁾のことであるが、「日本漢文」を教材に採り上げることで「我が国の文化と中国の文化との関係について考えることは、我が国の伝統と文化を理解することに資する」¹¹⁾効果が期待されていることがわかる。

「日本漢文」とは、我が国の人物が漢文体で記した文章のことであるが、従来は頼山陽をはじめとする近世以降の人物の作品が教材として採択されてきた。紀伊国名草郡出身の薬師寺の私度僧であった景戒の編んだ説話集『日本靈異記』は、日本漢文の範疇に入る作品である。序文を含めた三巻の全編に漢文体の表記が採られているのは、まだ仮名表記が十分に定着していなかった九世紀初頭の成立という時代的制約のためである。従って、近世の文人が、自らの教養に基づいて漢文体を選んだ作品とは一線を画することになる。『日本靈異記』は、『古事記』『日本書紀』『万葉集』、各国「風土記」等と並んで上代文学研究の範疇とされてきた。固有の文字を持たず、漢字を用いた日本語表記をせざるを得なかった平安時代初期の状況を知ることを通して、「我が国の文化と中国の文化との関係について考え」「我が国の伝統と文化を理解」するためには、適した教材であると言えることができる。

Ⅲ. 『日本靈異記』の僧

『日本靈異記』は上・中・下の三巻から成り、それぞれの巻には35・42・39の計116縁の説話が配されている。それぞれの内容の大筋は、各巻冒頭の序文に拠って知ることができるが、そこに「僧」の語を含むものは、「仏」を扱うものに比して意外に少なく、以下に各巻の序文に拠って示した6縁のみである。

上巻 僧、心経を憶持し、現報を得て、奇事を示す縁
第十四
悪人、乞食の僧を逼して、現に悪報を得る縁
第十五
僧、湯を湧かす分の薪を用ちて他に与え、牛と作りて役われ、奇しき表を示す縁 第二十
三宝に帰心し、集草を欽仰し、誦経せ令めて、

現の報を得る縁 第三十二

中巻 僧を罵ることと邪淫とによりて、悪病を得て死ぬる縁 第十一
法花経を誦持する僧を^{あざけ}りて、現に^{ゆが}口喎斜みて、悪死の報を得る縁 第十八

上巻の第十四縁では僧の法力、上巻第二十縁と中巻第十八縁では逆に僧の悪行やその報いがそれぞれ主眼とされており、僧を尊ぶべきことを主題としたものは残る2縁に過ぎない。僧のことは、「比丘」上巻二十六縁（以下「上26」の如く示す.）、「沙弥」（上27・29〇、中1〇、下15、33〇）、「聖人」（中7〇）、「法師」（中35〇）、「沙門」下3・4・21・30、「禪師」（下6・39）とも書かれており、更に「行基大徳」（中29・30）の説話も二話含まれている。僧への敬意を主眼としているのは、〇を付した五縁にとどまるのである。

ここでは、僧の尊重を主題とする上記の7縁のうち、「己が高徳を^{たの}しみ、^{せんぎょう}賤形の沙弥を^{しやみ}刑ちて現に悪死を得る縁」（中巻第一）を教材として選ぶことにする。この章段は、元興寺の大法会場で、僧のための食事を紛れて受けようとした貧しい身なりの私度僧がおり、それを笏で打った長屋王が、後に報いを受ける内容である。この章段は、登場するのが高等学校の日本史の授業にも「長屋王の変」として取り上げられる著名な人物である点に特徴がある。『日本靈異記』には、先述の行基のように、著名な人物を登場させる章段もあるが、ここでは長屋王が靈験を顕したり、修行によって徳を積むといった肯定的な扱われ方をするのではなく、極めて否定的な描かれ方をしている点が注目される。周知のように長屋王は、父を天武天皇の長子で夭折した高市皇子、母を天智天皇の皇女御名部皇女に持つ、極めて皇統に近い存在であったが、讒言により服毒自殺を遂げた人物である。こうした『日本靈異記』の扱い自体は、ある意味当然ではあるが、悲劇的結末を招いた要因を、王自身の僧に対する態度に求める独自の解釈が示されている点に大きな特徴がある。

Ⅳ. 『日本靈異記』を教材として学習指導案

対象；2 学年古典B

教材；『日本靈異記』中巻 「己が高徳を^{たの}しみ、^{せんぎょう}賤形の沙弥を^{しやみ}刑ちて現に悪死を得る縁 第一」（プリントNo. 1, 2 を配布する。）

古典B教材プリント

No. 1

特ニ己高德一刑ニ賤形沙弥一以現得ニ惡死一縁第一

諾楽宮 御ニ宇大人嶋国勝宝応真聖武太上天皇、おこシタマヒ發ニ大誓願一。以ニ天平元年己巳春二月八日一。於ニ左京元興寺一備ニ大

法会一。供ニ養ニ三宝一。勅ニ太政大臣正二位長屋親王而任ニ於供ニ衆僧一之司上。時有ニ一沙弥一。濫就下盛ニ供

養ニ之処上。捧レ鉢受レ飯。親王見之。以ニ牙冊一罰ニ沙弥之頭一。頭破流レ血。沙弥摩レ頭捫レ血、恠哭而忽不レ觀。所

去不レ知。時法会衆道俗偷嗔之言、「凶之不レ善矣」。逕之二日、有ニ嫉妬人。讒ニ天皇一奏、「長屋、謀レ傾

ニ社稷一、將レ奪ニ国位一」。爰天心瞋怒、遣ニ軍兵一陳之。親王自念、「无レ罪而被ニ囚執一。此決定死。爲

ニ他刑殺一不レ如ニ自死一」。即其子孫令レ服毒藥一、而絞死畢後、親王服レ藥而自害。天皇勅、捨ニ彼屍骸於

城之外一、而燒末散レ河擲レ海。唯親王骨流ニ于土左国一。時其国百姓多レ死。云百姓患之而解レ官言、「依

ニ親王氣一、国内百姓可ニ皆死亡一」。天皇聞之為レ近ニ皇都一、置ニ于紀伊国海部郡椒抄奥嶋一。

嗚呼、惆哉。福貴熾之時、高名雖レ振ニ華裔一、而妖災窘之日、无レ所帰、唯一旦滅也。誠知、怙ニ自高

德一、刑ニ彼沙弥一。護法輦蹙、善神憎嫌。著ニ袈裟一之類、雖ニ賤形一不レ応レ不レ恐。隱身聖人交ニ其中一。

故憍慢經云、「先生位上人、尺牟尼仏頂佩履踰人等罪云々」。何況著ニ袈裟一之人打侮之者、其罪甚深矣。

(原文は日本古典文学大系に拠ったが、一部を改めた。)

古典B教材プリント

日本靈異記

No.2

己が高德を待み、賤形の沙弥を刑ちて、現に悪死を得る縁 第一

3 諾楽の宮に 宇の大人嶋国御めたまひし勝宝応真聖武太上天皇、大誓願を發したまひ、天平元年己巳の春二月八日を以て、左京の元興寺に大法会を備け、三宝を供養したまひき。太政大臣正二位長屋の親王に 勅して、衆の僧に供する所に任じたまひき。時に一の沙弥有り。8 濫しく供養を盛る処に就きて、鉢を捧げて飯を受く。親王見て、牙冊を以て沙弥の頭を罰つ。頭破れて血を流す。沙弥頭を摩で血を捫ひて、恠し泣きて忽ち觀えず。去く所を知らず。時に法会の衆の道俗、偷に嗔きて言はく「凶し、善くあらず。」と。逕ること二日、嫉妬む人有りて、天皇に讒ちて奏さく、「長屋、社稷を傾けむことを謀り、將に国位を奪はむとす。」と。爰に天心瞋怒りたまひ、軍兵を遣して陣ふ。親王自ら念はく、「罪無くして囚執へらる、此れ決定めて死なむ。他に刑ち殺されむよりは、自ら死なむに如かず。」と。即ち其の子孫に毒薬を服ま令めて、絞り死し畢はりて後、親王薬を服みて、自害せり。天皇勅して、彼の屍骸を城の外に捨てて、焼き末き河に散らし、海に擲てしむ。唯だ親王の骨のみは土左の国に流る。時に其の国の百姓死するもの多し。云に百姓患へて官に解して言さく、「親王の氣に依りて、国内の百姓皆死に亡す可し。」と。天皇聞しめして皇都に近づけなむと為て、紀伊の国の海部の郡の椒抄の奥の嶋に置きたまふ。14

嗚呼憫なるかな。福貴熾りなる時には、高名華裔に振へりと雖も、妖災窘むる日には帰る所無く、唯し一旦に滅びむ。誠に知る、自らの高德を估み、彼の沙弥を刑ち、護法輦蹙み、善神憎み嫌ひたまふことを。袈裟を著たる類、賤形なりと雖も恐れざる心からず。17 隱身の聖人も其の中に交はりたまへり。故に橋慢經に云はく、「先生に位の上の人にして、尺迦牟尼仏の頂を履佩きて脚む人等の罪云々。」といへり。何ぞ況んや、袈裟を著たる人を打ち侮る者は、其の罪甚だ深し。

註 1 高德―高位・高官であること。 2 沙弥―修行僧 3 諾楽―奈良 4 大人嶋国―日本 5 勝宝応真聖武天皇―第四十五代天皇 6 元興寺―南都七大寺の一
7 長屋の親王―天武天皇の孫、神龜六年に陰謀により自害したのが長屋王の変 8 濫―厚く、さやいて 9 牙冊―象牙 10 嗔―さやいて 11 社稷―国家
12 国位―天皇位 13 氣―死靈の放つ悪氣 14 椒抄の奥の嶋―現在の和歌山県在田氏市の沖ノ島 15 華裔―都から地方まで国中に 16 護法―梵天・帝釈天・四天王など、仏教を守護する善神 17 隱身の聖人―人の姿となつて衆生を救いに来た仏や菩薩 18 橋慢經―未詳の現存しない經典

日本靈異記 成立年未詳。九世紀初頭に薬師寺の私度僧であつた景戒の編纂した最古の仏教説話集原文は漢文表記されている。訓読した本文はちくま学芸文庫に拠つたが、一部を改めた。

単元の日標：

- (1) 古典としての漢文を読む能力を養う。
- (2) 漢文訓読調のリズムを読み味わい、説話に関心を深める。
- (3) 自らの知識に基づいて、内容を正しく捉える。

- (4) 日本漢文の訓読を通して、ひらがな成立以前の我が国に、中国の文化がもたらした影響を考える。

学習指導案（四時間扱い）

	指 導 内 容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
第 一 時	<p>導入 (5分) プリントNo.1を配布し、漢文の 返り点について確認する。</p> <p>展開 (35分) 本文を書き下し文にする演習。</p> <p>まとめ (10分) 書き下し文を確認し、No.1の教 材が、どのような性質の作品か を考える。</p>	<p>見出し文の訓読の指名読み。</p> <p>配布された縦書きの罫紙に、本 文の漢文を書き下す。</p> <p>配布されたプリントNo.2と対照 して、書き下し文を確認する。</p>	<p>「一」「二」点と併せて、「レ」点、 「上」「下」点についても要領よ く板書して確認させる。</p> <p>机間巡視をしながら、適宜個別 に指導を加える。必要に応じて、 助字と再読文字については、板 書しながら注意を促す。</p> <p>読み間違い易い箇所については 板書をしながら解説し、確認さ せた上で書き下し文を回収する。 登場人物「長屋の親王」に注目 させる。</p>
第 二 時	<p>導入 (10分) 作品について理解する。</p> <p>展開 (35分) 漢文訓読のリズムに慣れる。</p> <p>前半部4行「～知らず。」までの 本文の書写。</p> <p>前半部の内容を理解する。</p> <p>まとめ (5分) 長屋の親王が、沙弥の頭を打っ た理由を考える。</p>	<p>作品の説明の指名読みを聞き、 板書をノートにとる。</p> <p>本文の指名読み。</p> <p>ノートに3行ごとに本文を写し、 難訓語句にはルビをふる。</p> <p>一文ごとに指名読みしてから施 註し、口語訳する。</p> <p>「沙弥」と「僧」の立場の違いを 理解する。</p>	<p>板書で、作品の成立と特徴、長 屋王の変にも言及しつつ要領よ く纏める。</p> <p>反復して読み、漢文訓読のリズ ムを意識させる。ルビのふられ たものも含めて、難読の漢字の 読み方を確認する。</p> <p>右に註、左に字数を要する口語 訳を書くことを説明し、字間の 余裕を持って本文を写すよう指 示する。作業中、机間巡視しな がら前時の書き下し文を返却す る。</p> <p>「大誓願」「大法会」のイメージ が捉えやすいよう説明する。</p> <p>見出し文の「己が高徳を待み」 に注目させる。</p>

第三時	導入 (5分) 前時の内容の復習と本時の内容の確認.	前時のノートを確認する.	長屋の親王の行為が、どのような結果を招くかに注意を促す.
	展開 (40分) 本文4行目「時に」～10行目「置きたまふ。」までの内容の理解.	本文の指名読み. ノートに3行ごとに本文を写し、難訓語句にはルビをふる. 一文ごとに指名読みしてから施註し、口語訳する.	反復してリズムよく朗読をさせながら、難読の漢字の読み方と難解な語句をチェックさせる. 机間巡視しながら、理解度を確認する. 会話の発話者を意識させる.
	まとめ (5分) 長屋の親王が死に至る経緯を考える.	文脈から、讒言→征伐→自害の流れを押さえる.	本文4～5行目に書かれた、道俗の囁きの意味を考えて来るよう課題を指示する.
第四時	導入 (5分) 前時の内容の復習と本時の内容の確認.	前時に出した課題について確認する.	出された意見を箇条書きに纏めるが、結論は急がない.
	展開 (35分) 後半部11行目「嗚呼惻れなるかな～」以降の内容の確認. 教材の章段の趣旨を考える.	本文の指名読み. ノートに3行ごとに本文を写し、難訓語句にはルビをふる. 一文ごとに指名読みしてから施註し、口語訳する. 長屋の親王の死を、沙弥を尊重しなかった報いと説く編者独自の解釈を理解する.	リズムを意識させる. 編者の見解を述べた後日談であることを理解させる. 歴史的事実を題材に解釈を加えて唱導の材料とする説話の方法に気づかせる.
	まとめ (10分) 中国文化の我が国への影響を理解する.	なぜ『日本霊異記』が漢文体で書かれているのかを考える.	プリントNo.1を参照しながら、仮名の発明以前には、漢字による日本語表記が行われていたことに気づかせる.

評価：

単元の目標：

- (1) 古典としての漢文を読む能力を養うことができたか.
- (2) 漢文訓読調のリズムを読み味わい、説話に関心を深めることができたか.
- (3) 自らの知識に基づいて、内容を正しく捉えることができたか.
- (4) 日本漢文の訓読を通して、ひらがな成立以前の我が国に、中国の文化がもたらした影響を理解できたか.

V. まとめ

前稿に引き続いて、『日本霊異記』を古典（古文）の教材として扱った授業展開の提唱を行った。今回取り上げた中巻冒頭の説話「己が高徳を待み、賤形の沙弥を刑ちて現に悪死を得る縁 第一」は、内容面では僧への不敬を戒めることに主眼が置かれている。編者は、歴史上の人物であり、極めて天皇に近い立場にあった長屋王を主人公に選んで、その悲劇が引き起こされた原因を、奢りから沙弥を軽んじたためと説いているのである。これは正史である『続日本紀』や『懷風藻』には見られない、『日本霊異記』独自の解釈である。高等学校の日本史の授業を通して馴染み深い人物が題材で、しかもそれが「仏罰」の対象者とされている

点で、関心を惹き易い話柄であると思われる。日本漢文教材としては、難易度、分量の何れも大変扱いやすいものだと言うことができよう。

今後は、更に稿を改めて『日本霊異記』別の章段についても教材としての可能性を検討してゆきたいと考える。

参考文献

- 1) 工藤 浩 (2014) : 「教材としての『日本霊異記』論序説」, 九州共立大学研究紀要, No.4, Vol.2, p83-86
- 2) 文部科学省 (2010) : 『高等学校学習指導要領解説 国語編』
- 3) 参考文献2) 前掲p14
- 4) 参考文献2) 前掲p36
- 5) 参考文献2) 前掲p36
- 6) 参考文献2) 前掲p60
- 7) 参考文献2) 前掲p67
- 8) 参考文献2) 前掲p67
- 9) 参考文献2) 前掲p73
- 10) 参考文献2) 前掲p70
- 11) 参考文献2) 前掲p70

Received date 2015年1月7日